

2021年度 公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費 実績報告書

2022年 4月 25日

北九州市立大学長 様

(所属・職名) 基盤教育センター・准教授
(氏名) 廣川 祐司

2021年度に交付を受けた公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	エコツーリズム・グリーンツーリズムから「サステイナブルツーリズム」へ					
	合計	使用内訳 (単位:円)				
交付決定額	592,340	備品費	消耗品費	報酬	その他	旅費交通費
執行額	401,520	0	13090	0	33050	355380
執行残額	190,820	0	205110	35000	76450	-125740
共同研究者	所属・職名		氏名		役割分担等	
	地域共生教育センター ・特任教員		岩本晃典		観光学研究に本研究を 位置づける	

研究分野：地域資源管理論、環境学、観光学、地域社会学

キーワード：サステイナブルツーリズム、フットパス、関係人口、交流人口

研究成果の概要（和文）

これまで観光は、サービス業として位置づけられ、ホストがゲストに財やサービスを提供することで対価を得る産業と位置付けられてきた。しかし、サステイナブルツーリズムにおいては、地域環境や文化を支えるアクターとして外部者が位置づけられており、消費者（交流人口）ではなく関係人口として認識する方考え方が生まれている。本研究は新たな観光の形態を観光学の系譜に位置づけ、現在のマーケットエコノミー（市場経済下）の観光とは異なる、ギフトエコノミー（贈与経済下）の観光による地域創生の形を提言するものとして取り組んできた。

下記にある「4. 研究成果」に記載のある、論文①はそのモデルとなりうる熊本県美里町の取り組みを検証し、他地域と比較研究した。そのうえで論文②では、美里町のような地域を作るべく、北九州地域における我々の活動地である直方市の事例研究を論文化した。内容

としては、外部者としての地域への望ましい関わり方についてである。そして、最後にそのような実践的な教育を学部ぐるみで実施する北九州市立大学の地域創生学群の観光教育を論文③で明らかにしている。決して、ビジネスモデルとしては大きな利益は生じないが、地域のファンづくりには大きく貢献する観光形態であり、リピーターの獲得を伴う関係人口の増加に寄与する取組であることを調査・研究によって明らかにすることができたと考え

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果としては、下記「4. 研究成果」にある、3編の論文の公表が大きいものである。論文①は新たな観光の形として、「フットパス+α」の取り組みによって、地域のファンづくりの仕掛けができつつあることを現地調査をもとに明らかにした。これまでの観光の考え方である「交流人口の増加」から、観光による「関係人口の増加」を目指すための方策について論じている。

論文②は論文①で明らかにした「関係人口の増加」を実現する為に、「外部者」が果たす役割について論じている。望ましい外部者の立ち位置と関わり方について、具体的に論じている。また、さらに論文③は、実践を通じた地域とともに観光開発に取り組む取り組みを、日本交通公社の機関紙である「観光文化」に投稿し、掲載されている。論文③は北九州市立大学地域創生学群の教育の特徴とともに、(特集 観光振興に貢献する地方公立大学：地域における現状と課題、そして期待) -- (観光振興に貢献する地方公立大学の取り組み) という特集に「九州の公立大学を代表」して、観光教育に取り組む事例を公表することができた。

また、本研究の研究成果を共有・議論する場として、研究代表者が主宰する「自主研究会」を月に1回実施し、合計9回実施した。参加者は本学教員4名、他大学の大学院生2名、高校教員1名、本学大学生3名で実施してきた。本研究テーマを継続的に議論する研究グループを生み出すことができたことも学術的な成果として大きい。

1. 研究の背景

新型コロナウイルスの世界的な広がりを受け、グローバル社会の中における「観光」の形が変わってきている。観光と環境の関係でいうと、屋久島などへの自然体験ツアーなどの「エコツーリズム」や農家民泊のような「グリーンツーリズム」が一般的となっているが、これには安価、大人数、均質的という特徴を有する「マスツーリズム」と同じ問題点を有しているといえる。それは観光客などのゲストが、受け入れ地域となるホスト側に大きな負担をかけ、地域の環境や文化を搾取したり、破壊したりするという点である。

具体的には、自然と共生して暮らす地域側（ホスト）において、外部者（ゲスト）が

地域の「ありのままの生活文化」を楽しむための望ましい「ホストとゲスト」の関係性を明らかにする。サステナブルツーリズムは現在概念や理念としては確立されてはいるが、「主客一体的な具体的な観光形態」を明示できてはいない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、観光客（ゲスト）と受け入れ地域側のホストとが共生できる「サステナブルツーリズム」を模索することにある。観光客を単なる観光サービスの消費者としてではなく、地域の関係人口の一人として認識し、その地域を応援するファンとして対価を支払うという、新たな観光スタイルの提唱を目指す。

環境と観光の視点から、これまでのエコツーリズムやグリーンツーリズムとは異なる、関係人口に基づいたギフトエコノミー下の「サステナブルツーリズム」が成り立つための「ホスト(地域住民)とゲスト(外部者)」の望ましい関係性について、明らかにする。

3. 研究の方法

- ①「観光」を市場経済下の財・サービスへの対価とは異なる、地域創生の手法として望ましい形でのツーリズムの形を模索する（文献調査）
- ②サステナブルツーリズムの具体的な取り組みのためのちいき調査を実施する。
- ③月に1度、研究代表者と共同研究者および代表者のゼミ生の有志、外部者で共同研究会を開き、本研究の進捗状況を報告し合いディスカッションを行う（研究成果の定期的な発表の場づくり）。

4. 研究成果

以下の3編の論文を発表することができた。また、研究成果の一部を様々な行政機関の審議会委員を務めることによって、政策立案の際に本研究成果の一部を埋め込むことができた。

<論文>

- ① 廣川祐司他（2022）「フットパス先進地域から学ぶ『フットパス式まちづくり』に挑戦する地域—熊本県美里町、大分県臼杵市、滋賀県東近江市の現地調査から—」、『地域創生学研究』第5号，pp.135-158.
- ② 廣川祐司他（2022）「直方市におけるフットパス活動のこれまでとこれから」、『地域創生学研究』第5号，pp.159-172.
- ③ 廣川祐司（2021）『「地域振興のためのフットパス観光」に取り組む地方公立大学

の挑戦：北九州市立大学」,『観光文化』,日本交通公社,第45巻第3号,pp.50-53.

<行政系の各種審議会委員>

- 行橋市第6次総合計画審議会委員
- 中間市まち・ひと・しごと創生総合計画審議会委員
- 中間市観光まちづくり協議会 理事

直方市におけるフットパス活動のこれまでとこれから

Activities for making footpath in Nogata City

廣川 祐司、塩崎 涼音¹、吉村 真琴²、吉村 昌大¹
Yuji HIROKAWA, Suzune SHIOZAKI,
Makoto YOSHIMURA, Masahiro YOSHIMURA

<要旨>

近年、歩く観光まちづくりの手法としてフットパスづくりに取り組む地域が増えてきているが、外部者が地域にどのように関わるべきなのか、地域への入り方、立ち位置の問題など多くの課題が存在する。本論文は、福岡県直方市の地域活性化に寄与するフットパスづくり活動における外部者としての大学生の地域への関わり方について明らかにするものである。ここから得られた大学生の学びや知見は、外部者と地域との望ましい関わり方について、極めて有意義であると考えられる。

<キーワード>

フットパスづくり、外部者、地域との関わり方、大学生の気づきと学び、担い手づくり

1. はじめに

本稿はこれまで約6年間にわたる福岡県直方市のフットパスづくり活動を振り返って、活動の意義と成果を明らかにするものである。北九州市立大学地域創生学群の廣川ゼミでは、「フットパスづくりを通じた歩く観光まちづくり」の調査研究を行っている。このフットパスづくりには、様々な効果があると考えられており、地域の歴史や文化を学ぶことによる地域理解の高まりによって生じるシビックプライドの向上、小学校・中学校・高校などで行う地域学習のためにフットパスづくりを用いることで生じる「フットパスの教育的効果」、さらには新しい観光の形として観光開発の手法としても研究がなされている。さらには、本稿でも深く考察していきたいと考えている、地域において様々な人たちが連携することによって良い効果が生じる「地域づくり」という側面もある。

特に本稿は「外部者である大学生」と「地域住民」との連携の仕方、大学生の地域での立ち位置など、「外部者と地域住民」がどのような関係を構築し、協業体制を生み出すべきなのかについて、明らかにすることを目的の一つとしている。フットパスづくりをする

¹ 地域創生学群3年生、² 地域創生学群2年生

際、地域資源や美しい景観、文化などは長年にわたって、地域住民が日々の日常生活の中で維持・保存してきた貴重な資源である。フットパスづくりをする際は、地域にお邪魔しているという意識と、歩く人たちへ「地域を歩かせて頂く」という気持ちを持つことを注意喚起する必要がある。「地域が主役」という基本的なフットパスづくりのコンセプトを重視すると、外部者である我々大学生だけでフットパスコースを作成することはできず、必ず地域住民の方々と共に活動する必要性が生じてくる。その際、どのような働きかけをするべきか、どのような関係性を構築するべきか、何を担うべきなのかなど、「外部者が地域社会に入り活動するために考えなければならないこと」は極めて多い。地域に入り過ぎて、地域の主体性を阻害したり、逆に地域の慣習的なやり方を壊してしまったりする可能性もある。

したがって、本稿はフットパスづくりという一つの事例をもとに、持続可能な地域づくりのために、外部者と地域の望ましい関係性とはどのようなものなのかについて、深く探究してきたいと思う。

2. 直方市植木地区のこれまで

2.1 活動内容 / (経緯、目的《課題解決に向けた》、具体的な活動頻度等)

私たち、廣川ゼミ直方班が活動している福岡県直方市植木地区では、「歴史的建造物や文化財は多いが、それらが貴重な地域資源として広く認識されていない」という課題があった。そこで、我々は本課題を解決し、地域で文化継承をして行けるようにすることを目的に、地域に住む人が地域の魅力を見つけ、自分たちで情報を発信していけるようにするために、フットパスづくりの活動を行うこととなった。

本活動は、2015年に上記の課題に対して危機意識を有している植木地区の有志の人からはじまり、2017年中間市で開催される予定であった「全国フットパスの集い2017 in なかま」のオプションツアーである「なかまフットパスモニターツアー」に参加するなど、近隣のなかまフットパスに参加することでフットパスづくりに関する勉強に取り組んだ。その後、2017年の全国フットパスの集い当日には、1日目の午前中に行われたオプションツアーとして、当時未完成であった、植木地区の仮フットパスコースにてイベントを実施し、市外から多くのフットパス愛好家たちが植木地区を歩きに来た。その後、2018年、2019年の2年間をかけ、コース作成、体験会、モニターツアー、お披露目会を行い、現在2021年まで続き、直方市植木地区でのフットパス活動は、すでに6年目をむかえている。

廣川ゼミはもともと2014年より中間市役所と協力し、なかまフットパスづくりの活動を行っていた。当時は、中間市の遠賀川水源ポンプ室が世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとして指定される公算が高く、この世界遺産をもとに観光による交流人口の増加を目指している時期であった。しかし、元来中間市は北九州市のベッドタウンとして栄えた町であり、住宅地が多くあまり観光に関しては力を入れてこなかった

自治体である。そのため、観光財源に関しても乏しく、少額で取り組めるフットパスを中間市観光政策の柱として位置づけ活動が始まったのである。我々は中間市と市民団体「なかまガイドの会」と共同で、5つのフットパスコースを作成（2021年度現在合計7つのフットパスコースが存在する）し、「なかまフットパス」がFNQ（フットパスネットワーク九州）による、コース認定を受けるなど、フットパス活動に取り組んでいた。廣川ゼミでは、「なかまフットパスで培ったフットパスのノウハウは、他地域へ汎用性があるのか」について明らかにしたいという思いがあった。その当時、隣の市である直方市役所の職員がなかまフットパスに興味を持ち、「直方市でもフットパスづくりができないか」というご相談を頂く機会を得た。その担当者の方から直方市でフットパスづくりをするのであれば、植木地区が適していると強く推されたことをきっかけに、植木地区へ向かい、地域住民にフットパスについての説明をしたところ、「地域の様々な歴史的な文化財や資源を広く知ってもらうためにフットパスのような活動をしたかった」という前向きなご意見を頂いた。そのため、正式に2015年度より、直方市植木地区の住民有志の方々とともにフットパスづくりの活動を行うこととなった。

2.2 実施内容

植木地区でのフットパス活動は現在に至るまで、段階的変化を遂げている。

はじめに、2016年度から2017年度の約2年間は地域住民同士や「地域と学生の関係性構築」を進めた。地域の高齢者を対象とした健康サロン「はつらつ倶楽部」（写真1）の活動や地域のイベント「遠賀川いかだフェスタ」（写真2）へ学生が参加することで、外部者である若い人たち（廣川ゼミ生）が日常的に植木にやってくることに對する違和感の解消と、地域の方々の外部者への対応力を身につけていただくための信頼関係醸成の期間である。

さらに我々だけでなく、福岡県立鞍手高校の高校生と連携し、植木地区でのフットパスコースの作成を「地域学習の一環」として取り組んだ。その後、「全国フットパスの集い2017 in なかま」の開催日同日に植木地区のコースもオプションツアーとして、植木地



写真1 はつらつ倶楽部の様子



写真2 いかだフェスタの様子

区でフットパスイベントを開催した。このフットパスイベントを契機とし、多くの植木地区の住民がフットパスへ興味を持つようになりはじめ、関わる人が増えた。

2018年度から2019年度の約2年間では「フットパスコース作成づくり」が本格的に進んだ。鞍手高校と連携し、作成した仮コースを地域住民が主体となって大学生と一緒にコースのブラッシュアップに取り組んだ。コース作成と同時に、フットパスリーダーの資格を取得している学生と、同じくフットパスリーダーの資格を有する「なかもガイドの会」の方が植木地区の公民館を訪れ、植木地区の地域住民に向けての「ガイド養成講座」を行った。その際には、なかもフットパスガイドの方のお話や、フットパスに関する知識やガイド技術についての学びも行われた。また、地域内で行われる定期的なイベントや活動へ学生も参加し、フットパスの周知や啓発活動を行った。

植木地区で初めて完成したフットパスコースは、「筑前植木みはらしコース」であり植木地区の外周を回り高台から植木地区の全貌が見えるようなコースである。このコースの道探しやマップ作成は地域住民が主体となってすすめ、フットパスを完成させた。筑前植木のフットパスマークには、フットパスの足形の横に植木地区のシンボルである花ノ木堰おおいちようが描かれている（図1）。2020年2月16日には「筑前植木みはらしコース」のフットパス体験会として位置づけられたフットパスのお披露目会を実施した（写真3、4）。



図1 筑前植木のフットパスマーク



写真3 お披露目会の集合写真



写真4 お披露目会の食事の様子

2020年度から現在にかけては、「フットパスを持続的に行うための組織づくり」を進めている。これまで「フットパス」を全く知らなかった植木地区の住民の中に、少しずつ「フットパスの認知」がされ始め、一部の有志の方のみならず、より多くの住民を巻き込んで地域にフットパスを定着させる段階に入った。そのために、まず「筑前植木みはらしコース」以外にも、新たなコースづくりをしたいという地域住民の声が出てきたことを受け、住民主体での自主的な会議の開催や、コース名の検討などが行われるようになった（写真5、6）。コロナ禍で学生の現地活動が難しかったが、地域内部で話し合いが行われるように電話やオンライン上で促し、「新コースのコース名や体験会スケジュールなどを考えてみませんか」と持ちかけるなどの工夫をおこなった。新コースを仮決定した後、体験会の実施に向けても地域住民を中心に、コース上の関係者への呼びかけ、チラシ作成、体験会当日の食事の準備やガイドの手配まで、地域住民が主体となって準備できるような段階に至ったのである。

植木地区の住民が新たなフットパスコースづくりに主体的にかかわったことによって、地域の方々からは、「連絡・連携の難しさを痛感し、フットパス活動を地域全体での取り組みに変える必要があると感じた」「フットパス活動の持続化を検討することや長期的に取り組むのであれば、組織づくりが必要だ」との課題があがった。今後の植木地区のフットパス活動については、有志の活動ではなく植木地区全体として、地域を挙げてフットパスづくりに取り組むための地域組織づくりをしたいという動きが住民たちから出されたことは極めて大きな進展であると感じている。



写真5 ランプリングの様子



写真6 新コース作成に向けた会議の様子

2.3 成果（到達点） / （地域のはじめと現在の変化）

第3節では、これまでの活動から気づいたこと、地域住民の変化について述べていく。2016年から2021年の現在に至るまで、第2節で述べたように「地域と学生の関係性の構築」「フットパスコース作成」「フットパス活動を持続的に行うための組織づくり」と段階的に取り組んでいった。それぞれ段階の変わり目には以下のような変化が起きている。

まず、「地域と学生の関係性構築」と「フットパスコース作成」の期間では、地域の魅

力をうまく言葉にできなかった地域住民が、他者に伝える経験をしたことから、実際に地域内外に発信できるように変化した。地域住民が「鞍手高校生」という地域外の人たちと連携し、フットパスコースを作成したことによって、地域の魅力を他者に伝える経験を得たことから、地域の価値を他者に伝える側へと変化していった。

地域のイベント、取り組みに参加したことでの変化として、大学生が「はつらつ倶楽部」や「遠賀川いかだフェスタ」へ参加したことで、地域住民との信頼関係構築につながった。また、地域内部の資源（ヒトやスポットなど）を知ることにもつながり、フットパス活動外の地域活動の重要性を理解することが出来た。このように一見すると、フットパスづくりには関係ないような地道な地域の方々との繋がりを継続することで、最近では植木地区内を歩いていると、住民の方から「北九大の学生さんよね」「いつもご苦労様」という声をかけていただくことも多くなった。これは我々の活動が、次第に植木地区の住民に認知され、フットパスづくりの活動が地域に定着してきている証左であるといえる。

次に、「フットパスコース作成」「フットパスを持続的に行うための組織づくり」の期間では、今まで一部の有志による活動だったため、このままでは属人的な運営になること、特定の一個人に負担が偏る危険性があることから、地域住民の中から地域として、正式なフットパス活動に取り組むための組織づくりをしようという提案が地域側からなされた。このことから、地域住民が主体的に考える変化が起きたことがわかる。これは、フットパス活動が地域内で持続可能な活動に向かうための大きな変化である。さらに、植木地区でのフットパスお披露目会に、隣町の植木市新入地区からの参加者が多くいたことで、新入地区でもフットパスづくりをしてみたいという声が上がリ、直方市の中で少しずつフットパス活動が広がりを見せている。

2.4 学生の学び / (学生の変化、成長、地域活動の変化等)

これまでの活動から、我々大学生は「フットパスを地域に定着させていくための汎用的な方法」についての学びを得ることができた。まずは「地域の人自分たちで地域に埋没している魅力的な資源を再発見し、誇りをもって自分たちで発信していく」ことが必要であるということである。そのためには、外部者である我々大学生が、その潜在的な地域資源の価値について、正しく評価し、地域側へ伝える責務があることがわかった。我々の外部者の声を地域住民の皆さんが真摯に聞き入れてくれ、その地域資源を活用したり、発信したりしようという気持ちになっていただくためには、地域住民との信頼関係の構築が必要である。そのため、活動の初期段階では、地域に馴染むために外部者である大学生は、フットパスづくりとは一見関係ないような活動であっても、すでに植木地区で行われている地域活動に参加し、地域住民との信頼関係を構築していくことが必要なのではないだろうか。そして植木地区の方々が段階的な変化を遂げるごとに、大学生の立ち位置として、「フットパスづくりに一緒に取り組む人」から「住民主体でフットパスづくりをする際にサポートする人」へと変化してきたといえる。重要なのは、地区の現状や特徴に応じて、外部者

である大学生の望ましい立ち位置を変化させて取り組んでいく力が必要なのである。地域住民の主体性が発揚するにしたがって、地域の中で持続可能なフットパス活動への気持ちが高まり、地域のフットパス活動に取り組むための組織づくりをするべきだという声が高まった。お隣の新人地区でもフットパス活動がはじまったこともあり、今後は植木地区内での正式に自治会活動として植木フットパスが定着し、新人地区との地域間連携が発展していくことが期待される。

3. 直方市新人地区のこれまで

3.1 活動内容 / (経緯《植木地区でのフットパスイベント参加からのつながり》、

目的《課題解決に向けた》、具体的な活動頻度等)

2020年10月から植木地区に続き、新人地区でも地域住民とのフットパスづくりの活動が始まった。近年、直方市では市内の小中学校区単位で「まちづくり協議会（以下、まち協）」の設立を目指してきた。このまち協単位でのまちづくり活動は、近郊の北九州市や中間市など、北部九州の自治体では積極的に取り入れられている手法である。新人小学校がある新人地区では、この直方市のまち協の設立を念頭に、地域のまちづくり活動を推進する組織として「新人地区活性化企画部」を立ち上げた。しかし、設立当初、具体的なまちづくり活動が定まっていなかった時期に、お隣の植木地区において、我々と住民とが協業してフットパスイベントが実施された。2020年2月16日に開催された植木地区の「みはらしコース」のお披露目会に、「直方市自治区公民館連合会（以下、自公連）」の会長、事務局長を始め多くの役員が参加したことが、新人でフットパスづくり活動を始める大きなきっかけとなったのである。

その後、自公連の会長と事務局長が「新人小学校区」からの選出であったこと、すでに一足先にフットパスづくりに取り組んでいる植木小学校区の代表が自公連の副会長を務めていたことから、新人地区でもフットパスづくりを始めようという機運が高まったのである。その中でも、新人地区におけるフットパス活動において中心的立場となったのが、自公連の事務局長を務めるK氏である。K氏はフットパスづくりを通し、低コストでまちの魅力を見つけることができるフットパス活動が新人地区におけるまちづくり活動の柱としてぴったりではないかと考え、植木地区でフットパスづくりに積極的に取り組んできた植木地区のM氏に新人地区でもフットパス活動を行ってみたいと相談があり、M氏を通じて我々廣川ゼミと繋がったのである。

この新人地区には以下の大きく4つの抱える課題があった。

1. 自治区、公民館の加入率をどのようにしてあげるかについて
2. 防災・防犯について
3. 地域の福祉について

4. 環境について

これらの新入地区の課題については、まずは「地域の実情を理解し、地域にはどのような資源があるのか、歴史や文化を正しく認識することによって、住民のシビックプライドを高め、地域コミュニティへの帰属意識を高めていけるような活動」を展開することが、まちづくり活動の第一歩であると考えていた。そのため、新入地区のまちづくり活動を促進するためにも、新入地区の6つある公民館長のみならず、地区の消防団員などの地区の若手にも、この新入のまちづくり活動参加してもらいたいと考え、「新入地区活性化企画部」を発足した。この活性化企画部の活動の支援部隊として消防団の方々を入れ若い人達を巻き込み、新入地区に6つある公民館の内、最も若い天神公民館の館長を企画部長として抜擢した。しかし、先に述べたように、発足当時の活性化企画部では何を行うか悩んでいるという状態であったということである。

また、新入地区には歴史的に貴重な史跡が多数保存されており、魅力的な箇所を皆で歩きたいという地域側の声もあがった。さらには上記した4つの課題についても、地域内の様々な道や地形などを理解している住民が増えれば、地域の防災や地域環境の理解にも寄与するし、地域の方々がフットパス活動に興味を持ち、活動が活発化していけば、住民同士の繋がりもより濃密になり、日常的な繋がりの中から防犯や地域福祉の向上にも良い効果を及ぼすと考えたのである。このような背景から、新入地区ではフットパスをまちづくりの手法として用いる運びとなった。

新入地区におけるフットパス活動の目的は大きく3つある。1つ目は、新入地区には史跡などが数多くあるため、それを活かしたフットパスコースを作成し、地区内外の人に周知すること。2つ目は、地域全体で集まる機会をつくること。3つ目は、これらを踏まえ新入地区が抱える問題解決にフットパスづくりを活用することが有効であること。

これらの3つの目的を達成するべく、月に1回は学生と地域住民とのミーティング（写真7、8）し、月に2回は地域のランプリング（写真9、10）を行うことを基本的な活動としている。



写真7 新入地区フットパスの会議の様子



写真8 新入地区フットパス会議の様子



写真9 新入地区フットパスのランプリングの様子



写真10 新入地区フットパスのランプリングの様子

新入地区におけるフットパス活動の特徴は大きく2つある。1つ目はお隣の植木地区と異なり、地区内の有志によるフットパスづくりではなく、地区内でフットパスづくりを中心的に担う「新入地区活性化企画部」という地域組織が存在するという点である。新入校区活性化企画部は顧問、部長、事務局、支援グループに分かれており、各公民館館長が所属するだけでなく、消防団員も支援グループとして入ることによって多世代の方々での活動となっている。

2つ目は、隣町の植木地区の活動を見てきていることから、フットパスづくりの活動のイメージをある程度持った状態で活動が始まっているという事である。2章で述べたように植木地区では地域に入り込むところから始まり、1から地域の方と外部者である我々大学生が信頼関係を構築しながら、一緒に作り上げるという活動スタンスで臨んできた。一方、新入地区では我々大学生に対して、フットパスコースづくりを教えてほしいというお声掛けで活動が始まったため学生は外部者としてアドバイザーの立場で活動に取り組んでいる。

3.2 実施内容

2節では更に新入地区におけるフットパス活動について記述していく。新入地区における主なコースづくりの流れは以下の通りである。まず第1ステップとしては、フットパスコースを決めるために、フットパスづくりに関わる中心人物たちが定期的に候補となる道を探し、地域に埋没した魅力的な地域資源の発掘作業を行う。その際、我々大学生のような連携者が、多世代の視点や外部者からの評価を地域に伝えながら行うことが望ましい。その活動を1年近くの年月をかけ、ゆっくりと何度も調査や協議を行うことで、新入フットパスの理想像や目指すべきフットパス像が共有されていくのである。

そして、次の第2ステップの段階としては、ある程度、仮のフットパスコースができてきたら、地域の人を対象に体験会を行うことである。体験会とは、地域住民の皆さんに「フットパス」というものを理解してもらい、外部からセルフランプリングにやってくる地域へ

の訪問者があった際、地域住民が理解を示してもらうために必要な過程である。つまりは、地域内への「フットパスの周知」のために必要な過程なのである。また、ガイドの練習や参加者からのコースやガイドに関するアンケートを行うことを目的としており、これをもとにイベントの流れ、コース、ガイド方法について改善していくこともできる。

さらに次の第3ステップとしては、地域外の方も参加対象に含めたモニターツアーを行うことである。これはフットパスを地域の内部で内輪的に楽しむものではなく、外から歩きに来た人、つまりは外部者の客観的な評価を得るために実施されるものである。この外部者からの評価や指摘を受けて、更なるフットパスづくりの改善を行うのである。この過程は外部者からのフィードバックを得る過程であり、新入フットパスをより魅力的なものにするためのものといえる。そして最後の第4ステップとして、マップを作成し、道標などのコースの目印、ガイドの養成、地域のお母さま方などのフットパスを行う上での支援組織の充実などを行って、最終的に完成したフットパスコースのお披露目を開催するのである。

新入地区における主な活動日程は以下の通りである。

2020年10月30日：ミーティング（地域住民と大学生との顔合わせ）

2021年3月20日：ランブリング調査

2021年4月24日：ミーティング（新2年生の紹介、3月のランブリングをもとにしたコース確認）、ランブリング

2021年6月26日：ミーティング

2021年7月24日：ランブリング調査（コースを全部歩いてみる）

2021年9月25日：オンラインミーティング

2021年10月23日：ミーティング、ランブリング調査

〈今後の予定〉

・2021年3月6日（日）9:30～

地域住民向けの体験会開催予定

・来年度4月以降 モニターツアーの実施

まず、2020年10月30日初めてご連絡をくださったK氏と大学生のミーティングを行い、顔合わせをはじめ、新入地区の現状・課題を確認し廣川ゼミのフットパス活動や魅力、新入地区でフットパスを行う理由等を確認した。

2021年3月20日には、初めてのランブリング調査を行い、まちなかをメインに歩いた。この際、地域の方が事前にスポットなどを調べてくれていたためそれをもとに歩くことができた。

年度をまたいだ2021年4月24日、ゼミ活動に新2年生が加わり、再度教員から北九州市立大学地域創生学群の紹介を行い、今後のスケジュールに関するマスタープランのご提案をし、「新入地区にフットパスコースを1つ作成し、地域住民向けにフットパス体験

会を実施する」ことを2021年度の目標として地域側との共通認識とした。これはまず地域内の方々に新入地区でフットパス活動が行われている事を認知して頂くことを第一義的な目的としたためである。しかし、その後、新型コロナウイルスのまん延により、福岡県内は緊急事態宣言発令がされてしまった。その期間はオンラインによる会議を地域側と行っていたが、大学生にとって想定外だったのは、大学生が来なくとも地域の方々が少人数で集まり地域を歩き回り、次の会議時には新たな提案をしてきてくれたことである。これは大学生にとって嬉しい誤算であり、改めて新入地区の皆さんのフットパスにかける思いの強さを知る機会となった。

緊急事態宣言が発令されている期間外は毎月大学生も新入へランブリング調査行いに通い、地域の方々とともにコース上のスポットや道の調査を行った。公式的な月1回の活動以外にも、地域住民のみでランブリング調査やミーティングも定期的に行われており報告も行ってくださっている。我々の想定をこえ新入地区の皆さんは、フットパスづくりに前向きに励んでおり、現在、地域の方が新たに2つのコースをご提案してくれたのである（図2、3）。魅力的な地域資源スポットや歩いて楽しい小径や美しい景観、由緒ある寺社仏閣など、2つのご提案頂いたコースの内、どちらを今年度の新入フットパス体験会のコースとして取り上げるか、非常に悩ましい展開となっている。

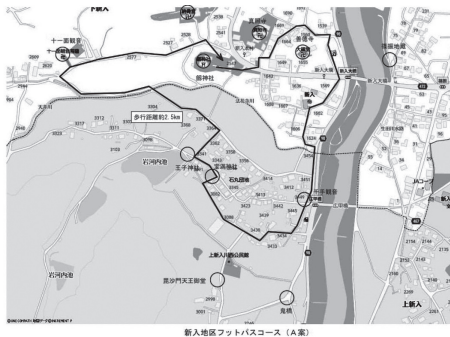


図2 新たに提案されたコース①

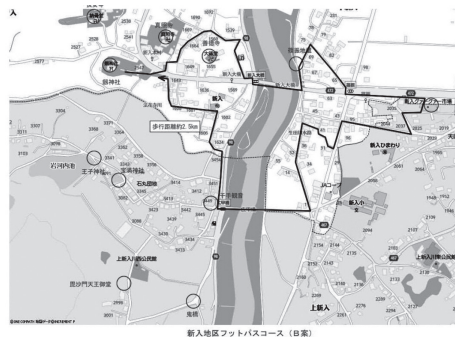


図3 新たに提案されたコース②

体験会に向け活動が進む中、現在、地域外への広報として大きく3つ行う予定となっている。1つ目は市報に新入フットパスのお知らせを掲載することである。2つ目は、12月に行われるまちづくり協議会でのプレゼンテーションである。新入地区でフットパスづくりの中心的人物であり、自公連事務局長のK氏が出席される予定の会議に、大学生から新入地区におけるフットパス活動をはじめ廣川ゼミの活動を発表してはどうか、とK氏からお声掛けがあった。3つ目は、市長も出席する直方市議会の一般質問に、直方市におけるフットパス活動の支援を行政としてもするべきであると考えがいかがか、という内容の質疑応答がなされたことが報道されたことである。新入フットパスの主要関係者で新入小学校区の6つある公民館の館長の1人は、市議会議員を務められておられ、その方が我々とフットパスづくりの活動をする中で、フットパス活動の意義や効果について深く感

銘を受けていただいたために生じた現象である。公民館長をも務める市議会議員さんは、我々とのミーティングの際により直方市が行政としてバックアップをしてもらい、直方市の全ての地区でフットパスづくりが展開できたら良いとお話していただき、市議会での一般質問内容を共有して下さった。4つ目は地域内の新入小学校区の自治区の会議にてフットパス活動をお知らせして下さるとい事である。ここでは、1つ目で記述したチラシも配布することとなっている。

3.3 成果（到達点） / （地域のはじめと現在の変化）

もともと2021年度の新入地区の目標として「新入地区にフットパスコースを1つ作成し、地域住民向けにフットパス体験会を実施する」ということを掲げていた。しかし、新入地区の皆さんは非常に積極的に活動に参加して下さっており、地域の方だけのミーティング、ランプリング調査を行いながら、自主的に調べたり行うべきことを提案したりして下さっている。このように地域の方の非常にポテンシャルが高く、初めて参加する方が少しずついっしょに、体験会に向けてより一層のフットパス活動の認知度が高まり、地区内の関係者増加が目に見えて成果を上げてきている。また、目立つ色の服を着て歩くことや、直方自治区公民館連合会の旗を作成し、それを持ってランプリングを行ったりして、歩く姿を多くの地域住民に見えるように活動の可視化に努めてきている（写真11, 12）。従って、新入地区におけるフットパスづくりは、福岡県に2度の緊急事態宣言が発令され、活動が一時停滞した時期があっても、順調に推移し、3月に体験会を開催予定とし活動を進めている。



写真 11 目立つ色の服を着用されている



写真 12 旗を持って歩く様子

3.4 学生の学び / （学生の変化、成長、地域活動の変化等）

新入地区での活動で、「組織の重要性」を理解することができた。今まで、植木地区のフットパス活動は、大学生が植木地区内の様々な地域団体の活動の中で知り合ってきた地域の方々が有志で集まってくれ、植木フットパスづくりを行ってきた。それに対して、新入は「新入校区活性化企画部」という組織をフットパス以前から構築していた。自公連会

長の T 氏のもと、各公民館長・公民館主事・消防団などの地域に影響力を有する重要な役割を持つ方で構成され、自公連の事務局長の K 氏（新入地区の 6 つある公民館の 1 つの館長も兼ねる）から各位に重要事項を伝える連絡網もある。

この地域において組織的動けることの良さは 2 つあると私たちは感じている。1 つは連絡漏れが少ないこと。誰かが会議に参加しない日があっても、連絡網により確実に情報共有することができている。もう 1 つは責任の所在が明確であり、意思決定がスムーズに行えているという点である。ボランティアでのまちづくりと違い、組織体制を強固にすることで、誰が、何を、いつまでにしなければいけないのが明確になっている。実際に新入地区と植木地区とでは、学生と地域間の連絡の取り方や連絡事項の説明の仕方などで違いがある。その違いが生じる理由はこの「組織化されているか否か」の差が大きく関係しているのではないかと考える。また、地域の方が非常に積極的に活動して下さるため、その分変更が度々生まれる。高い意欲を持った地域の方のモチベーションをフットパスづくりに活かすためにも、変更を把握し対応できるようにと学生間での確認や意見出し、実際に地域に足を運ぶ回数を増やすといった活動の変化も感じている。

植木地区との活動の比較を行う中で学んだことは、「地域の実情に合わせた外部者としての学生の立ち位置の違い」と「フットパスの根付かせ方の違い」である。第 3 章 1 節で述べたように、新入地区への学生の関わり方は、あくまで外部者としてフットパスづくりに関するアドバイザー的立場で関わらせて頂いている。これは地域側からのコースづくりを教えてほしいという依頼から活動が始まり、かつ地域側に自立的に活動できる組織があるため学生が深く入り込む必要がないためである。また、新入地区におけるフットパスの根付かせ方は、活性化企画部という活動を中心に行っている人・団体が明確であり、そこに関わっている人の知人や歩いている際に会話する人たちに認知されていくという形で広がりを見せている。これは、植木地区におけるフットパス活動の根付かせ方とは異なっていることが分かる。

これらのことから同じ市町村であるからといって、どの地域でも成功するフットパス活動の型があるわけではなく、取り組む地域によって違うことを学んだ。しかし、この新入地区でのフットパスの広がりや、植木地区における 5 年間にわたる地道なフットパスづくりの関係性があったからだと感じている。植木地区において、地域でフットパスづくりに関心を持って下さる有志の方々が、我々との活動に飽きず、フットパスコースを一緒になってともに作り上げ、外部者であり、世代も立場も異なる我々を、フットパスづくりをする同じ仲間として、ずっと寄り添いながら活動を続けてくれてきたからに他ならない。その植木フットパスの取り組みがあったからこそ、新入地区においても、自分たち地域でフットパス活動を展開したいという声が上がったのである。これからは、植木地区がフットパスづくりのノウハウを教え、新入地区が地域内で持続的に活動できる組織作りの手法を教え、相互で教え教えられる関係性として、直方市内でフットパスをより魅力的なコースとして地域に定着していけるように、我々も共に頑張りたい。

4. おわりに

福岡県直方市でのフットパスづくりの活動は、2021年で6年目を迎えている。当初はここまで直方市での活動が長く続くとは思っていなかった。廣川ゼミで行政と連携してフットパスづくりに初めて取り組んだのはお隣の間門市である。間門市ではフットパスを観光政策の柱と位置づけ、に市民団体である「なかまガイドの会」と間門市世界遺産推進室（当時）と廣川ゼミが3人4脚体制で「なかまフットパス」づくりを行ってきた。当時の直方市は、あまりフットパスづくりには興味を示さず、間門市と同じ取り組みをした所で、注目されることはないという評価であった。そのため、植木地区の方々にはフットパスづくりに熱意をもって取り組んでくれていたが、十分な行政との繋がりが無い以上、いつかは行き詰まりを見せるのではないかと、漠然とした不安感があった。

しかし、本論文でまとめてきたように、植木地区の皆さんは大学生と一緒にフットパスづくりに取り組み、福岡県立鞍手高校の高校生にもフットパスづくりのレクチャーを行ってくれた。その成果として、「筑前植木みはらしコース」を作り上げ、植木フットパスのPRのために体験会やお披露目会などのフットパスイベントも主体的に開催してくれた。ガイド役や地域内での調整など、積極的にフットパスづくりに取り組んで頂き、今では「この道はフットパスらしくないな」や、「フットパスガイドとしては、しゃべりすぎだよ」などという会話を住民同士でするようにまでなった。

さらに転機となったのは、植木地区のフットパスイベントに参加した新入地区の方々が、「新入地区でもフットパスづくりを始めたい」と申し出て頂けたことである。幸いなことに、新入地区の公民館の館長たちの中に、自公連の会長や事務局長、それに市議会議員さんがいらっしやったことで、直方市全域を対象とした広がりを見せつつある。新入地区のフットパスづくりは非常に組織だっており、高い自治力を発揮して極めて自立性の高い状態でフットパスづくりに取り組んでいる。隣り合う同じ自治体の中でも、「外部者である大学生の担うべき役割」に大きな違いがある。我々大学側の学びとしては、外部者が地域に入り込む際、その立ち位置は決して一様ではないという点である。フットパスの理念や「地域が主役である」という考え方は、統一的なものであるが、地域でフットパスづくりの手順は定型的なものを地域にはめ込めば良いというわけではないことに気づくことができた。

最後に、ではフットパスづくりは各地域の実情に合わせて「臨機応変に取り組めばよい」のかと言われれば、私はいささか違和感を持つだろう。確かに地域資源や担い手の有無、地域のまとまりなど、各地域で異なるが、その場にあわせて臨機応変にというよりは、多様な作り方マニュアルを複数用意しておき、活動地域に合わせて選択ができるようになれば良いと考えている。つまり、臨機応変とは決して行き当たりばったりではなく、そのシーンに合わせて最も適するマニュアルを見つけ出す力なのではないかと考えている。そのためにも、多様な地域で様々なフットパスづくりの手法を集積し、体系化を今後ますます進めていきたいと考えている。

フットパス先進地域から学ぶ
「フットパス式まちづくり」に挑戦する地域
—熊本県美里町、大分県臼杵市、滋賀県東近江市の現地調査から—

Field surveys for finding footpath courses in several areas

廣川 祐司、山口 美乃¹、塩崎 涼音¹、久松 実優¹
Yuji HIROKAWA, Yoshino YAMAGUTI,
Suzune SHIOZAKI, Miyuu HISAMATSU

<要旨>

本研究はフットパスを用いたまちづくりの先進地域である熊本県美里町のまちづくり手法である「美里式フットパスづくり」を模倣し、他地域においても美里式フットパスづくりによって、地域活性化を目指す、2つの地域を調査することで、美里式フットパスが「成功」と評価される理由やその条件について明らかにする、比較研究である。

<キーワード>

美里式フットパス、フットパス式まちづくり、地域内連携、交流人口、関係人口

1. はじめに

1.1 本研究の背景

フットパスとは、英国を発祥とする古い街並みや田園風景など、地域のありのままを楽しむことのできる小径である（日本フットパス協会HP）。近年、このフットパスの活動を通じて地域活性化に取り組んでいる地域が全国的に増えてきている。日本におけるフットパスの広がりには、1990年代後半に東京都町田市におけるNPO法人みどりのゆびの活動と北海道における環境市民団体エコ・ネットワークの活動によって始まる。その後、2009年2月に東京都町田市、山形県長井市、山梨県甲州市、北海道黒松内町の4自治体が発起人となって、日本フットパス協会が設立された。九州におけるフットパスの広がりには、2013年11月に熊本県美里町で開催された『『全国フットパスサミット in 美里』地域を元気にする魔法—フットパスはまちをどう変えるか—』（日本フットパス協会と美里町との

¹ 地域創生学群3年生

共催)が契機となった。美里町は2011年から町内でフットパスづくりを始めた九州におけるフットパスづくりの先進地域である。

現在、美里町内には16ものフットパスコースが敷設されている。美里町のフットパスづくりを通じた地域活性化策は、「美里町への交流人口の増加」を意図したものである。地域を主役とし、地域全体で歩く人を歓迎するコンセプトの下、美里フットパスのファンを増やし続けている。このような美里町における「フットパスを用いた地域活性化」の方法は「美里式フットパス」(寺村, 2015)と言われ、地域活性化の手法の一つとしてモデルとなっている。まち全体で歩く人を歓迎する考え方は、フットパスの発祥の地である英国の「Walkers are Welcome Town (WaW)」(塩路, 2018)の取り組み極めて高い類似性を有している。

この「美里式フットパス」づくりの手法を模倣し、他の地域でも地域活性化の取り組みを始める地域が増えてきている。本稿においては、「美里式」を導入している2022年度に「全国フットパスの集い(全国大会)」を実施する予定の大分県臼杵市の取り組みと、これから美里式のフットパスづくりにシフトチェンジしていこうとしている滋賀県東近江市の現状と調査した結果をまずはまとめておくこととする。そのもとで、これら2つの事例地と熊本県美里町とを比較することで、「フットパスづくり」がまちづくり活動と、どのような関係があり、どのような効果が生じるのかなどについて考察し、ある程度汎用性を有する「フットパス式まちづくり」のモデルを提唱することを本論文の目的とする。

1.2 「美里式フットパス」の到達点

美里町では、美里フットパス協会が中心となって毎月1回、町内のフットパスコースにて「フットパスの楽しみ方」「地域の歩き方」をPRするためのフットパスイベントを実施している。参加料はガイド料や保険料、昼食、おやつ(休憩代)も含め、1人2,500円である。他地域のフットパスイベントと比較すると、高めの値段設定となっているが、毎回20名の定員をほぼ超過する申し込みがあるという。美里フットパスの特徴は、極めて高いリピート率である。これは、参加者が単に消費者というだけでなく、美里町のファンになっているということである。

美里フットパス協会の事務局機能は、合同会社フットパス研究所(代表:井澤り子氏、以下研究所)が業務委託を受けて行っている。フットパス研究所は、美里式フットパスを作り上げた美里フットパスの創設期の中心メンバーである井澤り子氏と濱田孝正氏を中心に立ち上げた、歩く人と地域を結び地域のファンを増やす取り組みを推進し、「歩く文化を創造する」会社である。研究所では、美里町内だけでなく、日本全国に美里式フットパスのノウハウを伝えることを仕事としている。フットパスづくりの指導のために地域に赴いたり、研修を引き受けたりするなどの活動を行っている。美里町の現状は第2章に詳細をまとめるが、当初、美里フットパスが目的としていた「交流人口の増加」は少しずつ達成されてきている。現在は美里フットパスを楽しみに歩きに来てくれる方々に対して、

より滞在時間を長くし、より多くの地域の方々との接点の提供や地域文化を楽しむことのできる仕組みづくりを始めている。これらの取り組みは、フットパスによって美里町を訪れる人が増え、交流人口が増加していたため、その次のステップへと昇華し、単なる地域へ訪れる「お客様」としてではなく、地域のファンとしてより積極的に美里町に関わってもらい、美里町の「関係人口」の一人となってもらうような取り組みであると考えている。

JTB 総合研究所「観光用語集」によると、「交流人口とは、その地域を訪れる人々」とされ、その地域に住んでいる人に対する概念である。殊に、訪れる目的は問わず、観光やレジャーのためだけでなく、通勤・通学、買い物、学びのために地域を訪問するという理由でも交流人口とされる。一方、関係人口とは、総務省の「関係人口ポータルサイト」によると、「移住した『定住人口』でもなく、観光に来た『交流人口』でもない、地域と多様に関わる人々」の事を指す。なお関係人口は、単に地域を訪問する交流人口とは異なり、地域外の人材が「地域づくりの担い手」となることが期待されている（図1）。

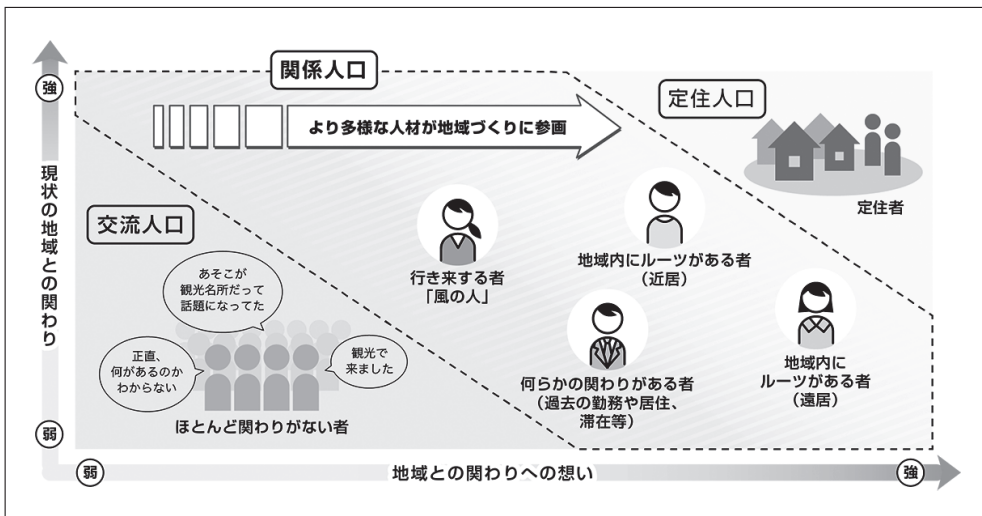


図1 交流人口と関係人口との違い（総務省関係人口ポータルサイトより引用）

2. 熊本県美里町での調査

2.1 調査目的・調査概要

今回2021年8月17日－18日と11月6日－7日、12月4日－6日の3回、フットパスを用いたまちづくりをしている地域のなかで先進地域とされている熊本県美里町へ赴き、調査を行った。美里町は熊本県中心部である熊本市から南東約30kmの場所に位置する人口約1万人弱の町である。その町で誕生した美里フットパスは2010年から始まり、現在ではフットパスコースを16コース設けている。町外からも多くの観光客が訪れるフッ

トパスの聖地であり、美里フットパスの地域ブランドを確立している。

このように美里フットパスが地域ブランドを確立できた背景には、地域内連携によって、地域全体でフットパスづくりを展開しているという特徴が大きく関係している。美里フットパスは、美里町役場、商工会、美里フットパス協会、縁側カフェ実施者、小学校、農家、農業協同組合（農協）、飲食店、美里町産業連携協議会などといった、地域内の様々なアクターが、自分たちのできることを明確に役割分担しながら、美里フットパスの運営に携わっている。町内の各種団体が連携することで美里フットパスが、地域を挙げて歩く人を歓迎しているという面的な広がりを想起させるのである（図2）。そのため、美里フットパスでは、すでに固定客となる地域のファンづくりがある程度達成されており、次なる段階への挑戦の時期に来ている。

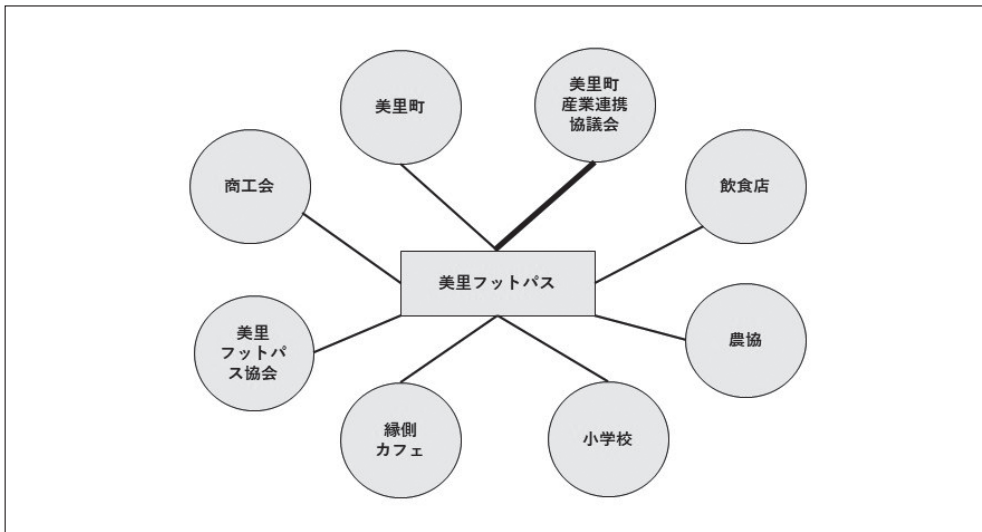


図2 美里フットパスの地域内連携

美里フットパスによって、交流人口の増加という目標をある程度達成された美里町では、次なる段階として、フットパスづくりの際に連携体制を構築できた町内の各種業態の人たちとともに、歩きに来た人たちと直接交流して頂くことで、交流人口を関係人口へと関係性を深めていく取り組みを始めている。そのハブとなる組織が、2016年に設立された美里町産業連携協議会である。今回の調査の重要なカギとなる美里町産業連携協議会（以下、協議会）は美里町の多様な地域資源等を活用した新商品やサービスの開発、販路開拓、町内外への情報発信などといった地域経済活性化の取り組みを促進することを目的とし、情報発信部会、観光部会、民泊部会、商品部会を有した団体である（図3）。ここでポイントとなるのが、単にこれらの様々な取り組みを展開する部会を整え、組織化すれば良いというわけではなく、美里フットパスによって交流人口が増えたため、その来訪者に対して

供給できる新たな商品やサービスの開発をする組織であるという点が重要である。つまり、美里フットパスの「成功」があったからこそ、新たなコミュニティによる新たな活動へと広がることができたのである。

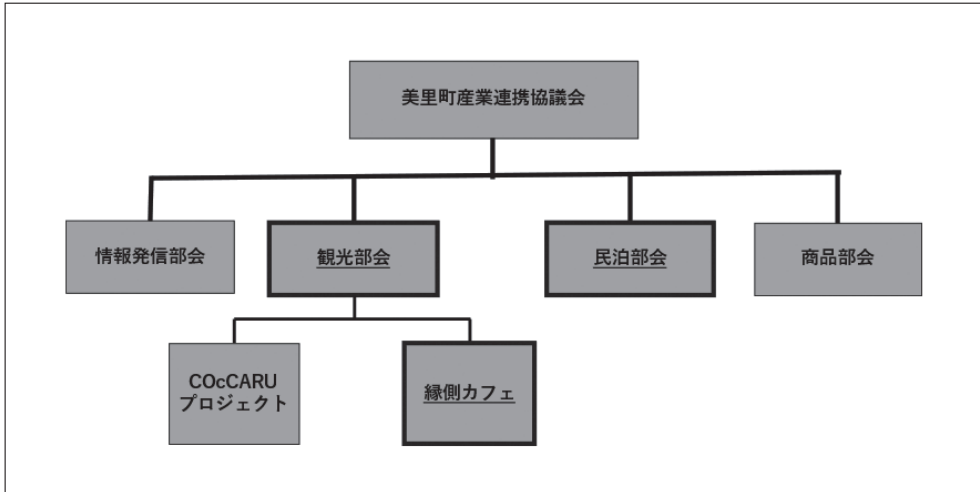


図3 美里町産業連携協議会 組織図

協議会の観光部会では、美里にやってくる来訪者の滞在時間を延ばすための体験型観光について2つの取り組みを始めている。1つ目はCOcCARU（コッカル）プロジェクトである。「美里町の山里を守り、生かし、未来につなぐ」というコンセプトのもと、焚き火拾いから始まり山里の暮らしを伝える「焚き火サイト」や山菜の収穫、出荷、調理といった地域体験ができる「山菜ファーム」など地域資源を使った取り組みを行っている。これらの活動を支えるのは、美里町内の一般の農家や地域のお母さまであり、自分の所有する山林での山菜の収穫や、耕作している田畑での焚火、地元食材を使用した郷土料理づくりなど、地域住民の関わりが無ければ成立しない活動である。また2つ目は縁側カフェである。本活動は、もともと美里フットパスを目的に町内に歩きに来た人をもてなすために始まった取り組みであり、現在では地域の食文化の継承の役割も担いつつある。これまでは、美里フットパスイベントの際に臨時的に地域のお母さま方が地区の公民館などに集まり、実施していたものが、フットパスイベントの無い日でも第2・第4日曜日の10時～14時に常設で美里町内の7か所で縁側カフェを始めている。この縁側カフェも元々は飲食業を営んでいる方ではなく、フットパスイベントの際に縁側カフェを実施していた地域の方が、常設化したものである。

また、上記の取り組みをしている観光部会とは別に、町内での民泊増加に向けた取り組みを行っている民泊部会がある。観光部会と連携しながら、民宿、民泊、農泊の開業に興味がある方を募集し、チラシを全戸配布したり、セミナーの開催を行ったりしている。町

内に存在する空き家や空き部屋を活用しながら、リフォーム等をして、宿泊施設の少ない美里町での「民家への宿泊」を推進している。このように、フットパスの成功事例とされている美里フットパスは、この「美里式フットパス」を活用し、更なる取り組みを展開している。従って、今回の調査目的は、美里フットパスの到達点と「美里式フットパス」を活用した「フットパス式まちづくり」の手法について明らかにすることである。具体的には、交流人口を関係人口化していくための仕掛けづくりについて、美里フットパスと美里町産業連携協議会の取り組みの関連性に注目しながら論を進めていく。

2.2 調査からわかったこと

今回の調査を通して、美里フットパスは交流人口を関係人口化していく段階であるということがわかった。2021年12月5日に開催された「お久しぶりの美里フットパス秋2021」というフットパスイベントでは、参加費2500円（会員は2000円）という値段設定にもかかわらず、定員に達する約30名の参加があった。イベントでは、ガイドのサポートもありながら、大井早そよ風コースを歩き（写真1）、地域の方とコミュニケーションをとったり、コース内にある椎茸の収穫（写真2）をしたりなど、地域体験ができる内容だった。



写真1 イベントの様子



写真2 椎茸を収穫している様子

また途中では軽トラを使った縁側カフェが用意されており、地元のお母さんたちが朝から準備してくださった軽食があった（写真3）。また、最後には収穫した椎茸や美里町のお米などといった美里町の食材を使った手作りの昼食があった（写真4）。このような体験を踏まえて参加者からは「参加費2500円では足りないぐらい貴重な体験だった」「また美里町へ行ってあらたな魅力を知りたい」といった声があり、なかには美里フットパスのリピーターで何度も美里町に足を運んでいる参加者もいた。このような美里フットパスイベントは、このイベントで収益を上げようとしているのではなく、「地域での正しい歩き方」

「地域の食文化などの地域の楽しみ方」を参加者や受け入れている地域の方々に理解してもらうために実施されているというのが特徴的である。このようなフットパスイベントなどを通して、美里フットパスのリピーターになっている参加者も多く、現在ではフットパスイベントを行わずともセルフランプリングをする人も増えている。そして、様々な地域の団体と連携し地域内の多様な方を美里フットパスに巻き込むことで、美里フットパスは魅力を増し、交流人口を増やすことに繋がっている。まさしく、美里フットパスは地域全体で取り組むという「面的な広がり」を見せているといえる。



写真3 軽トラカフェの様子



写真4 昼食

このように美里フットパスは当初の目的である「交流人口を増やすこと」はある程度成功しているという評価を得られている。従って、その次の段階へと目的を昇華させる時期へと来ているのである。つまり「交流人口を関係人口化していく」という段階である。そのために協議会を中心に進めている、農泊推進事業は美里フットパスを歩きに来てくれた人たちを関係人口化するための仕組みであるともいえる。美里町では、フットパスに来てくれた人たちの滞在時間を延ばすため、協議会民泊部会と美里フットパス協会が連携して、農泊を中心とした民宿・民泊を推進している。現在、美里フットパスの知名度の広がりをうけて、美里町のファンが増え、少しずつ滞在時間を延ばし始めているなかで、協議会の民泊部会の役割が関係人口を増やしていく上で、極めて重要な役割を担っているだろう。そこで今回の調査では、協議会民泊部会の呼びかけによって民宿事業を始めた「三千段の民宿 幸登里」と民泊事業を始めた「里山の宿 きつねのてぶくろ」の事例を調査し、その実態を明らかにしておきたい。

◎民宿「幸登里」を訪れて

民宿「三千段の民宿 幸登里」は、協議会から美里町内で全戸配布された民宿募集のチラシを見て、「里山の宿 きつねのてぶくろ」のオーナーと一緒に応募したのがきっかけで始めた民宿である。

調査で気づいたことは民宿や民泊、農泊が、特に地域の食文化という観点から、地域文

化の継承につながっていくのではないかとということだ。今回、調査を行った際にオーナーが軽食を用意してくださった。軽食では白菜のお漬物、ブルーベリージャム、梅ジャム、ふかしたサツマイモをいただいた。そこで出された白菜、ブルーベリー、梅は幸登里で採れたものを使っており、お漬物やジャムも自家製で美里町産の食材を味わうことができる機会となった。このように、今回いただいた軽食からでも美里町の食文化を体験することができたことから、民宿や民泊などで出される食事から地域文化の魅力を伝えることが可能ではないかと考えた。またその魅力を伝えていくことによって美里町の食をはじめとした文化を外部へ発信することができ、地域文化の継承につながっていくのではないかと考察した。

◎民泊「きつねのてぶくろ」に宿泊して

また「里山の宿 きつねのてぶくろ」に宿泊して気づいたことは、お客さんとの距離の取り方についてである。きつねのてぶくろのオーナーは自分もお客さんと一緒にお酒や料理を飲んで楽しみたいという思いから、料理や宿泊場所を提供するだけではなく、オーナーもお客さんと一緒にお話したり、ご飯を食べたりしながら、コミュニケーションをとっていた。しかし、民泊で適用される住宅宿泊事業法では食事提供が難しいため、民泊+食品営業許可を用いて宿泊者と触れ合える民泊の仕組みを作っている。ちなみに、今回の調査でいただいた食事は、開業前ということもあり、試食としてご提供して頂くことができた。

現在は民泊であるが、今後、民泊+食品営業許可という形を作り出すことで、美里町でとれた食材を使ったご飯を頂きながら、地域の人とのかかわりを生み出せる新しい形になるだろう。それらにより、ホストとゲストのコミュニケーションがとれやすいフットパス+aのアクティビティになるのではないかと感じた。この民泊制度を利用した、新たな宿泊の形は、旅館業を専門の仕事としている人以外でも、このような宿泊業を営むことができ、空き家や空き部屋を有効活用しながら、来訪者と交流を楽しむことのできる仕組みとして、今後ますます注目に値する取り組みであると感じた。

2.3 調査を通して分かったこと

今回の調査から、美里町は交流人口を関係人口化していく段階にあり、「フットパス+a(滞在時間を増やす)」という取り組みを展開していることが分かった。フットパスを歩きに来るだけではなく、歩きに来た人に向けてフットパス以外のアクティビティ(民宿や民泊・農泊、COcCARUプロジェクトなど)を通して、美里町の滞在時間を増やしていく段階であり、美里町はフットパス+aのアクティビティの部分に力を入れ始めている。

今まで美里フットパスの現時点とこれからについて述べてきた。では、美里フットパスを活用した持続可能な地域づくりにはどのような段階が必要なのだろうか。本調査からわかったこととして、美里フットパスの段階は大きく分けて3つあると考える。1つ目の段階は、地域資源の発掘である。自分の地域の資源を発掘できるかが重要である。美里フットパス

では、フットパスコース作りの過程のなかで様々な道を歩いたり、まちの人に声をかけることで地域住民からの目を入れたりなど地域全体を巻き込みながら、地域資源を発掘してきた。その過程の中で、町内の様々な関係者との連携を模索し、日常的に行っている役割を来訪者にも提供していくことで来訪者との交流を促すことを大切にしてきたのである。

そして、2つ目の段階は地域の人に理解してもらうことである。フットパスコースを作るだけでなく、地域にフットパスを落とし込んでいく。例えば、定期的なフットパスイベントの開催やそれに伴った縁側カフェの協力など地域の人や外部の人に向けて、フットパスの楽しみ方を発信していく。このような取り組みを繰り返していくことによって、イベントがなくとも自ずと定期的に歩きに来るまちになる。フットパスを特定の観光業者や一部の人たちだけのものにせず、地域の様々な人々や団体を巻き込んで、来訪者への対応に慣れてもらう、そして日常化していってもらうということが必要である。

そして、3つ目の段階は滞在時間の増加に向けたフットパス+αの取り組みである。この段階は交流人口を関係人口化していくために重要である。実際に地域資源を使った体験ができる COcCARU プロジェクトや縁側カフェ、民宿や民泊・農泊などの取り組みを行おうとしている。このような取り組みによって、美里町の滞在時間と美里町のファンを増やす仕組みを作っていくことで、美里町の交流人口を関係人口化していくことができているということが、今回の調査を通して気づくことができた。このように美里フットパスでは、様々な取り組みを無理なく長続きさせるために、地域の人が日常的にやっている、できる範囲のことを歩きに来る人たちにも提供して頂き、様々なアクターと連携して行っているからこそ、美里フットパスという地域ブランドが確立し、地域全体で歩く人を歓迎しているという「面的な広がり」をみせているということができる。

3. 大分県臼杵市での調査

3.1 調査概要「調査地目的、臼杵市とは（行政情報等）」

本調査は、2021年4月29日～5月1日に実施した。臼杵フットパスは前記した「美里式フットパス」の手法を踏襲し、地域文化の継承や交流人口の増加を目指している。臼杵フットパスは大分県臼杵市に存在するフットパスコースである。大分県臼杵市は、大分県の東海岸に位置し、2005年（平成17年）1月1日旧臼杵市と旧野津町が合併し、新しい臼杵市となった。市内に13のフットパスコースがあり、また、国宝臼杵石仏がある。その周辺も歩きやすいように道が整備され、マップも存在している。

臼杵フットパスの推進団体は、臼杵フットパス推進実行委員会（以下、推進実行委員会）が存在し、臼杵フットパス研究会と地域振興協議会の2つの組織によって構成されている。また、推進実行委員会とは別に、臼杵市野津町には、吉四六さん村グリーンツーリズム研究会（以下、GT研究会）が存在している。GT研究会とは、平成14（2002）年8月に発足された組織である。発足に至る経緯は、野津町の代名詞でもある吉四六さんの頓智話を

推進する仲間が、吉四六話に興味があり、訪れた方々との夜なべ談義が行われていたことに端を発した。そのように、野津町の農家の人が楽しみながら、また町の活性化に繋げたいという思いから、当時、わずか5軒で発足した。現在では、30軒を越える家庭（2021年聞き取り調査時における数）が会員となっており、国内はもとより海外からも野津町へ訪れる人が増え、農泊体験などを行っている。会の特徴として、運営・活動について、発足から現在まで、ほとんど行政の支援を受けないで行ってきていることが挙げられる。もう一つは、各受入家庭で最も大切にしている"心の交流"によって、多くのリピーターを生み出している点である（NPO 法人大分県グリーンツーリズム研究会 HP 参照）。このように、臼杵フットパスは、臼杵フットパス研究会を中心とする推進実行委員会と GT 研究会の2つの組織で進められている。

今回の調査では、臼杵フットパスの内、2つの地域で行われているフットパスづくりについて調査した。1つ目は、臼杵市野津町（旧野津町）において GT 研究会が手掛けるフットパスの新コースづくりに対する助言を行うべく美里フットパス協会の井澤氏の活動に同行する形で、調査を行った。GT 研究会の会員の案内の下、実際に計画されている新コースを一緒に歩き、その後、井澤氏の講義を受けた後に、新コースの策定に向けた話し合いにも参加した。GT 研究会では、地域の良さやおいしい地域の食材、そして郷土料理など、ありのままの良さを感じ楽しんでもらいたいという理念と美里式フットパスの考え方が一致し、GT 研究会では新たな体験メニューの一つとして、会員によるフットパスづくりが開始された。そのため、野津町のフットパスには途中の休憩場所で、地域のお母さまが手作りしたおやつが提供されたり、歩き終えて農泊を体験し、地域で採れた食材を用いた夕食がふるまわれたりするなどした。単に宿泊体験だけではない、地域を楽しめる新たなアクティビティとして、フットパスづくりが始まったのである。

2つ目は、臼杵市内の JR 熊崎駅周辺の新コースづくりに関する調査である。このコースは臼杵フットパス研究会の S 氏が中心となり、3つのグループに分かれて皆でセルフランニングによる調査を行った。我々とともに新コース作成をするという視点で、ともに道探し、地域資源探しを行った。その後、スタート・ゴール地点となる JR 熊崎駅の駅舎にて、振り返りの実施を行い、新コース案の提案を行った。

調査背景としては、2022年度に大分県臼杵市において全国フットパスの集い（フットパス全国大会）の開催を控えている。しかし、全国大会の開催に向けて臼杵市全体をフットパスで盛り上げていこうとする機運はまだまだこれからのように感じた。その理由としては、旧野津町でフットパスづくりを手掛ける GT 研究会と、旧臼杵市街地を中心にフットパスづくりを手掛ける臼杵フットパス研究会とでは、フットパスづくりに取り組む目的に差が生じているためではないだろうか。次節以降、本調査をもとに臼杵フットパスの課題について考察していきたいと思う。

3.2 調査から分かったこと・気づき

野津町では、GT 研究会の方を中心にフットパスに取り組むコアメンバー自身が楽しみ、GT 研究会の会員の活動をよりよくしていこうという意識を持って取り組んでいることがわかった。新コース作成のために歩いている際には、野津町の自然豊かな場所の話やワラビやゼンマイなどを教えていただきながら地域の方々と歩いた。休憩スポットでは、手作りのおやつをいただき（写真5, 6, 7）、楽しいお話しや再度歩き出す際に「行ってらっしゃい」と温かい言葉をかけていただいた。



写真5 おやつの写真



写真6 おもてなしの様子



写真7 GT 研究会食部会の方々との写真



写真8 夕食時の写真

夕食時間も様々なお話しから楽しい交流の時間を作っていただいた（写真8, 9, 10）。野津町の皆さんはフットパスの楽しみ方を理解し、地域の連携も強いと感じた。これは、元々取り組んでいた農泊での各受入家庭が最も大切にしてきた「心の交流」がフットパスの取り組みにとっても活かされているのだと思う。このように、野津町でのフットパスは野津町を存分に楽しんでもらうための、グリーンツーリズムの新しいアクティビティの一つとして、広がりを見せているといえる。



写真9 夕食の準備の様子



写真10 夕食の準備の様子

しかし、GT研究会の特徴でも述べたように、運営・活動について発足から現在まで、ほとんど行政の支援を受けないまま行ってきたことから、臼杵市全体のフットパスに取り組む、推進実行委員会とのつながりが薄い。つまり、GT研究会は会の発足から極めて独立性が高く、自立している組織であるため、行政と連携し市全体で取り組む一体感が薄く、市報などの行政による広報活動になかなかGT研究会の活動が取り上げられることが少ないという課題がある。フットパス全国大会に向けての情報発信の際に気をつけることについて話された際に、GT研究会事務局長のY氏は「今後、フットパスという言葉の浸透を臼杵市内に進めるためにも、行政からも発信をしてもらいたい」とおっしゃっていた。

野津町は、元々農泊で培ったノウハウを活かし「心の交流」あるフットパスに取り組んできた、それは自主的に楽しみながら取り組んでおり、内部の組織づくりは上手くいっていると言える。ただ、行政とのつながりが薄く、今後の取り組み方で重要になってくるフットパスの関係人口を地域内部で増やすためには、GT研究会以外の地域住民との連携や推進実行委員会との連携を強めていくことが必要であることがわかった。

次に、熊崎駅周辺でのセルフランブリングでは、熊崎駅周辺の地域の特徴として、地域の人のオープンな心の魅力がみられた。熊崎駅の駅舎には小学生が描いた絵やおすすめの本などが置かれていたり(写真11)、オープンガーデン(写真12, 13)があったり、地域側からの歓迎されている感覚を味わうことができた。

フットパス先進地域から学ぶ「フットパス式まちづくり」に挑戦する地域
—熊本県美里町、大分県臼杵市、滋賀県東近江市の現地調査から—



写真 11 駅舎内の様子



写真 12 オープンガーデンの様子



写真 13 オープンガーデンの設置看板

また、すれ違った地域の方と楽しくお話しをさせていただいたり（写真14）、手作りのツリーハウス（写真15）に登らせていただいたりと、セルフランプリングであったが、地域の方との交流がとても多かった。熊崎駅の駅舎の中には、小学生が描いた絵やおすすめの本など地域で暮らす人の形に触れる機会が多くあり、オープンガーデンも同様に、直接地域の人と会えずとも、間接的に地域の方とコミュニケーションが取ることができるとわかった。



写真 14 すれ違った地域の方とお話の様子

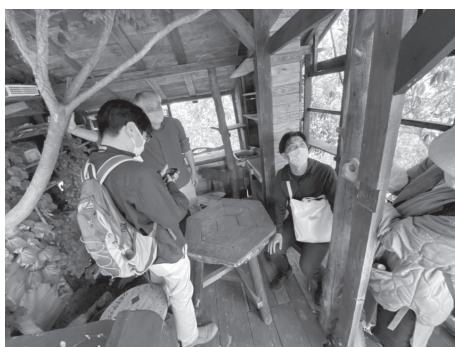


写真 15 手作りのツリーハウスの様子

フットパスは直接的なコミュニケーションと間接的なコミュニケーションがあることがわかり、今後の新たなコースを作る際には、地域の人々との関係の輪を広げることや今ある魅力を活かしながら工夫することが大切であると思われる。熊崎駅周辺に関して、セルフランプリングの段階であったが、地域の人々は外からきた私たちを受け入れてくれた。このことから、熊崎駅周辺はフットパスコースとしての導線を示すことで、「線的なつながり」をつくりだす可能性がみられた。今後は、段階的な地域住民と日常的な連携が大切である。

3.3 全体を通して分かったこと

大分県臼杵市のフットパスの現状は、地域住民との連携不足と臼杵市全体でのフットパスのブランディング不足であると考えられる。

野津町では、フットパスよりも以前から取り組んでいる農泊から、地域外の人を招く体制は地域内に備わっており、フットパス+ α の取り組みがされている。フットパスをツールとした、地域内の人や食文化、農泊などの資源同士の線的なつながりは行われている。しかし、臼杵フットパス全体としての連携やフットパスのブランディングは行われておらず、面的な広がりにはなっていない。GT 研究会以外の地域内部の住民の方々や、外部との連携が弱く、臼杵市内全体のフットパスづくりを進めている推進実行委員会との連携が薄いと感じられることも懸念事項の一つであると考えられる。

熊崎駅周辺でのセルフランプリングは、臼杵市駅周辺フットパスづくりの初期段階である。そのため、コース上の魅力的なスポットや人々が点状態である。今後のコースづくりの際には、地域の人を巻き込みながら進めていくことが必要になり、線的なつながりを考える必要がある。

今回、調査に訪れた臼杵市内のフットパスコースについて、美里式フットパスと比較すると、臼杵市全体での他業種による「地域内連携」による地域での役割分担が不十分であることが分かる。より各地域同士が連携し、臼杵市全体が共通の目的でフットパスづくりができるようになると面的な広がりに変化していくだろう。

4. 滋賀県東近江市での調査

4.1 調査目的・調査概要

本章では、2021年8月9日－8月11日に調査した東近江市フットパスの事例を取り上げる。本事例地と美里フットパスとの関わりは、2019年11月16日・11月17日に滋賀県東近江市において、龍谷大学が幹事校としておこなった「全国カレッジフットパスフォーラム2019（以下、全国フォーラム）」に始まる。この全国フォーラムに、フットパスネットワーク九州（以下、FNQ）が開催協力をしたことを契機とする。FNQの議長を務める美里フットパス協会会長の井澤るり子氏が、本全国フォーラムの開催に際し、様々な助言

フットパス先進地域から学ぶ「フットパス式まちづくり」に挑戦する地域
—熊本県美里町、大分県臼杵市、滋賀県東近江市の現地調査から—

を行っていたのである。そのため、その後中断を経つつ、美里式フットパスを志向するようになっていくのである。

東近江市とは、平成 17 年 2 月 11 日に八日市・永源寺町・五個荘町・愛東町・湖東町が合併して誕生し、その後、平成 18 年 1 月 1 日に能登川町・蒲生町と合併し、現在の東近江市が誕生した。

今回の調査で私たちは、東近江市の湖東地区と八日市地区の 2 つの地区を訪れた。東近江市では、行政主体で 2017 年に当時東近江市役所の「森と水政策課」の担当者である M 氏と龍谷大学の教授が中心となって指導する里山学研究センターの学生団体「みらいの環境を支える龍谷プロジェクト」とが連携して活動を行う形態で、東近江市フットパス活動が開始された。活動内容は、フットパスコース・マップの作成、フットパスイベントの開催が行なわれた。しかし、行政主体で活動を行っていた弊害として、学生が直接取材をした地域のお店をマップに掲載することが認められない等、地域と行政が大学生をサポートするために連動し合って活動していくことが難しい状況にあった。これは、行政として一部のお店のみを掲載することに対する、公平性の観点から、市役所内部で否定的な意見が出たためである。2019 年に東近江市で開催された全国フォーラム（写真 16）に向けて、東近江市内のフットパスを参加者に体験させるべく、①愛東コース、②奥永源寺コース、③八日市コースが策定されお披露目された。この時にはすでに、各フットパスコースも完成され、フットパスマップも作成されていた。しかし、その後新型コロナウイルスの影響もあり 2020 年を境に活動は休止状態となっている。その後、東近江市役所職員の M 氏のフットパスづくりに対する熱意によって活動は続けられたものの、M 氏の退職を機に、この活動は休止した。



写真 16 全国カレッジフォーラム 2019 のチラシ

そのような中 2020 年冬、湖東地区担当の地域おこし協力隊の方が、湖東地区においてフットパスづくりをしたいという申し出が美里フットパス協会の井澤氏にあった。この動きは東近江市主体で業務として降りてきたものではなく、湖東地区で指定されている地域おこし協力隊のテーマである「健康」によるまちづくりを達成するために、地域おこし協力隊の方が M 氏の紹介のもと、井澤氏への申し入れをしたことに始まる。元市職員の M 氏も湖東地区のフットパスづくりのサポート役として、湖東地区担当地域おこし協力隊と関わりを持ち、一緒に湖東地区のフットパスづくりを担っている。現在の段階としては、未だに地域の方を巻き込んでつくる段階にはなっておらず、各自で地域資源を調査し発掘し出す段階である。

今回の調査では、M 氏を中心とする東近江市と龍谷大学生で作成をした中のひとつである【八日市市街地コース】と、湖東地区担当地域おこし協力隊員が主となって現在作成途中の【池庄・大沢コース（湖東地区）】を調査した。

今回の調査目的は、東近江市におけるフットパス活動の現状の課題とその原因を明らかにすることである。そのために、東近江市でのフットパス活動休止期から現在のフットパスの活動再開に至った背景について述べる。その後、そこから見える東近江市フットパス活動の脆弱性の要因を明らかにするため、ロールモデルとなるために既存の 2 コースのブラッシュアップを東近江市フットパスを推進する関係者とともに実施した。その中で、どのような経緯で現状に至ったのか、何を考えて、どうしたかったのかなど、当事者の想いを明らかにするため、関係者へのエスノグラフィックインタビューを行なった。

4.2 調査から分かったこと・気づき

今回 2 つのフットパスコースの調査と関係者へのインタビューを通し、東近江市で行われていた過去と現在（調査当時）のフットパス活動の実態を把握することで、東近江市のフットパス活動における組織づくりに関する課題とその原因を示すことができた。

まず、はじめに、2 つのコース調査から気づいたことをまとめる。「八日市市街地コース」の調査からは、八日市の地区の魅力と生活感を味わうことで、コースとしての満足感を実感できた。コース名の通り市街地を歩くことから、地域住民の方とすれ違うことも多く、地域住民になった気分で生活の一部を空間から味わうことができた。路地の狭い住宅地に入り込む小径や歴史を感じることで昔ながらの店（写真 17, 18）、さらには市役所にて郷土産品を購入できるなどお金を落とす場所を創ることのできる場所が用意されているなど、歴史的な商人の町として発展してきたまちの経過を感じることでコースとなっている。

また、湖東地区で作成途中の「池庄・大沢コース（湖東地区）」の調査からは、地域住民と直接会うことができなかつたために生の声を聞いて愛着を図ることはできなかつたものの、景観の豊かさとその景観を支える地域住民の地域への愛着を実感することができた。特に印象的であったのが、田んぼのあぜ道の芝の特徴である。田んぼを眺める（写真 19）

フットパス先進地域から学ぶ「フットパス式まちづくり」に挑戦する地域
—熊本県美里町、大分県臼杵市、滋賀県東近江市の現地調査から—

と芝の生え方や色の違いから、人工芝と天然芝で分かれていることが確認できる。この人工芝は景観のために地域の農家さんが敷き詰めているため、その場所には地域の池庄町環境保全活動協議会の名で「芝を欠き取るな」の文字が書かれた看板が立ち（写真20）、雑草の草刈りをしないよう到来訪者へ呼びかける注意書きがされている。この特徴から、地域方々の地域の景観に対する想いの強さを感じ取ることができた。



写真 17 昔ながらの店「荒物店」



写真 18 昔ながらの店「荒物店」にて店主と話す様子



写真 19 田んぼを眺めながら歩く様子



写真 20 「芝を欠き取るな」の看板

次に、関係者へのインタビューより気づいたことをまとめる。東近江市役所OBのM氏へのインタビューでは、フットパスの位置づけと龍谷大学生との関係性について知ることができた。M氏のフットパス活動歴は約5年で、過去に「森と水政策課」に勤め、エコツーリズムや地域振興について活発に活動されていた。また、フットパスを趣味として位置づけており、その理由として、過去の活動で龍谷大学生が直接取材をした地域のお店をマップに掲載することが認められなかったという行政主体で活動していたからこそその弊害が挙げられた。そのため、普段の仕事では融通が利かないことが多く、退職後はフットパスを

趣味として位置づけるようになった。さらに、自由に地域内を歩き回りながら楽しむようなフットパス的な生き方をしていきたいと、フットパスを生活の一部として捉え、フットパスに対する熱意を持っていることも分かった。

龍谷大学生との関係性については、「八日市市街地コース」をはじめとする大学生と共に作成したコースは、学生が主となって作成したものであることが分かった。龍谷大学生の主な活動としては、コースの選定からマップの作成、フットパスイベントの開催であった。コース選定では、フットパス先進地でのヒアリング調査の実施、マップの作成では、デザインからサイズ感や掲載項目までこだわって作成をしている。さらに、来訪者と地域の方とのトラブルを未然に防ぐための、カントリーコードを地域の方と作成も行った。イベントでは、住民の方々との交流をすることで、フットパスの認知とイメージの向上を狙い、学生がガイドを務めた。さらに、参加者とのワークショップも行い、東近江市でのフットパスの輪を広げるきっかけに寄与していたと、M氏は龍谷大学生の活動を高く評価している。

ここでの気づきは、龍谷大学生の場合、コースの選定、マップの作成からガイドといった活動の役割を学生が担い、大学生が中心となってフットパス活動を行っていたということである。そのため、当時フットパス活動を行っていたM氏をはじめとする東近江市の地域の方の位置は、あくまで大学生の活動を支援するアクターであったといえよう。このように、特定の団体のみで活動を進めた場合、何らかの原因によりその団体の活動が難しくなった際、担い手がなくなり活動は終わってしまう。実際、概要にも記載した通り東近江市では、新型コロナウイルスの影響もあり、2020年を境に龍谷大学生の活動が休止になったことで、東近江市でのフットパス活動は途絶えている。さらに、東近江市には他にも龍谷大学生が手掛けたコースがあり、マップも存在するが、活動が休止状態となっている今、それらのコースは活用されていない。つまり、東近江市でのフットパス活動は、龍谷大学生の活動が休止したことにより、休止したのである。

このことから、龍谷大学生が多くの役割を担っていたために、地域内での役割分担ができていなかったということが分かった。つまり、特定の団体の何らかのフットパス活動において担い手づくりが重要であるのだ。

続いて湖東地区で開始したフットパスの「池庄・大沢コース」作成に携わる地域おこし協力隊員（以下、N氏）へのインタビューでは、現在の東近江市のフットパス活動の現状について知ることができた。N氏は自然に対する愛着が強く、東近江市の自然に惹かれ移住してきた。地域おこし協力隊に所属して2年目（調査当時）で、地域おこし協力隊の中で複数の業務を担っており、その活動のひとつにフットパス活動が当てはまる。はじめは、地域おこし協力隊のテーマが「健康」であったことであった。テーマに合わせてできることを試行錯誤する中で、東近江市湖東地区の魅力は自然であり、自然を楽しみながら歩くことは健康につながる効果があると思い、「フットパス」の仕組みを知り、2020年冬頃にフットパス活動を開始するに至った。しかしながら、N氏いわく湖東地区の地域の方

は内向き傾向な方が多く、共にコースを作成している地域の方はサポート役のM氏を除く2名のみという現状にあるという。

このように、現在の東近江市では、地域おこし協力隊のN氏が1人でフットパスづくりを再開したという特徴がある。これは、まだ少数ではあるが、美里町のフットパスのはじまりのきっかけである興味を持った人たちのみならずは集まり活動を始めたことを考えると、初期の段階では未だ評価することはできない段階であろう。

さらに、フットパス活動の経験と熱意を持つM氏がフットパスの再スタートを切った地域おこし協力隊員のN氏とつながったことで八日市地区の住民であるM氏が湖東地区の住民であるN氏へアドバイスをする形で活動ができていたことは、地区を超えた情報共有ができていたという点で、とても良い事であると感じる。このような休止期間を経て、再度東近江市においてフットパスづくりが再スタートできた背景には、フットパスに魅了されたM氏が市役所という組織的な縛りから解放されたことによって、個人的なつながりの中で新たなネットワークが構築できているからではないだろうか。しかしながら、懸念される課題も存在する。それは、湖東地区でも八日市市街地コースのように地域にフットパスを定着することができない状況に陥るのではないかと、危険性があるということだ。N氏が所属する地域おこし協力隊には任期がある。湖東地区のフットパスコースはまだ、魅力的な地域資源を発掘する段階である。それにもかかわらず、フットパス活動に対する地域の認知度が低く、フットパスづくりの活動に地域の住民の方々を巻き込んでいないのが現状である。このままでは、新たに作成しようとしている湖東地区のフットパスづくりは、以前、龍谷大学生を中心に作り上げた「八日市市街地コース」のように、地域の中にフットパスの担い手がなくなり、中心人物が何かしらの要因によって地域に携われなくなってしまう瞬間、フットパス活動が再度停止してしまうことが懸念される。

4.3 全体を通して分かったこと

滋賀県東近江市のフットパス活動の現状から、地域内部の役割分担といった担い手づくりの重要性と活動の継続によるフットパスの周知の重要性が明らかとなった。今回、訪れた調査地である東近江市湖東地区のフットパスコースについて、「美里式フットパス」づくりの段階に当てはめると以下のようになると考えられる。

東近江市ではフットパス活動が行われていた過去があるため、フットパス活動の土台は形成されているといえるだろう。しかしながら湖東地区は現在、コースづくりの途中段階で、メインアクターは地域おこし協力隊のN氏と過去に市役所OBのM氏の2名である。現状ではこれら2名の熱意によって再スタートされたフットパスづくりではあるが、個人として活動されているため、地域全体を巻き込むような組織だった活動が展開できない。コースづくりには、魅力的な地域資源の発掘のために、まずは地域を知ることが必要不可欠である。しかし、外部からやってきた人が地域の歴史や文化を深く理解することは、1人では困難であり、地域の方々との協業体制を構築する必要があるのだろう。本事例は未

だその段階に到達することはできておらず、スタートラインに立ったばかりだといえる。地域に点在する地域資源を発掘するという点、そしてそれを担っているのが個人的な活動であることから、東近江市フットパスは「点」的な活動として始まり、線的な広がりを目指していく段階なのだろう。

一方、熊本県美里町では、地域内部に存在する組織が連携し合い、連携が密にできる仕組みが形成されているからこそ、面的な広がりを持ち、大分県臼杵市では組織同士の連携は薄いものの、組織と組織をつなぐ線的な広がりをもつ。この2地域の特徴に対し、東近江市は、フットパスに魅了された方が個人的にフットパスづくりを行っており、点として動き始めたばかりである。コースに関しても地域内の連携が薄いため点と点を巡るコースづくりをしており、点状態であるために広がりも見いだせていない状態であることが分かった。

したがって、フットパスづくりにおいては、地域に存在する魅力的な地域資源の発掘、その資源に物語をつけ、魅力的なものとして巡る事の出来るコースの提示、そしてその場に存在する魅力的な地域住民との交流など、「点」を「線」化していく取り組みが必要となるであろう。その多数の線が、他業種との連携や地区を超えた取り組みとして地域内に広がることで、フットパス活動は「面的」な広がりを見せる。地域を挙げて、歩く人を歓迎するまちとなるための道のりは長いと感じた。しかし、本事例と他の「美里式フットパス」導入地域との比較をすることによって、「フットパス式まちづくり」は、どのように始めるべきなのか、その際の注意すべき点などについて、明らかにすることができたことは非常に大きな成果であったと考えている。

5. おわりに

5.1 「美里式フットパス」を取り入れる地域の実情

フットパスの先進地域である熊本県美里町の手法を取り入れ、地域の活性化に取り組もうとしている地域は全国で散見される。しかし、フットパスコースを作ることと、地域活性化を達成するまちづくり活動とは、必ずしも一致しないということは、これまでの調査事例を見れば明らかであろう。つまり、「フットパス式まちづくり」というものは、第4章で書かれているように、地域はそこに住まう地域の方々のものであるという認識の下、地域の生活空間を「歩かせて頂く」という視点が必要なのである。具体的には、「地域の方の理解を得ながらフットパスコースを作ること」、「交流人口の増加というフットパスコースづくりの目的を地域の方々と共有すること」、「地域内の様々な団体や人々と明確な役割分担をし、できることをできる人が担って、地域全体で歩く人を歓迎するフットパスとすること」などが極めて重要な要素であるといえる。これらの考え方を地域の皆さんで共有し、歩きに来る人を歓迎する町として、地域全体でフットパスづくりに取り組むことこそ、美里町から学ぶ「フットパス式まちづくり」が地域活性化の手法として効果を上げ

るための条件であると考ええる。

そのため、今回の調査では、美里式フットパスを取り入れる地域では、次のような段階を経る必要があることがわかってきた。まずは、第4章の滋賀県東近江市の事例からの気づきである。

東近江市でのフットパスづくりは、外部の大学生と地元の行政との連携によって始まった活動であるが、地域側はあくまでこれらの主体に協力する形での連携であったように感じている。大学生が何らかの事情で地域に來られなくなった場合、行政の担当者が異動や退職でいなくなった場合、地域の誰がフットパスづくりの中心的役割を担うのかが曖昧になってしまうことが生じる。そのため、この東近江市の八日市コースの作成の事例からも分かるように、フットパスコースがあり、フットパス Map が完成していても、その取り組みが地域活性化にすぐさま直結せず、少しずつ下火になってしまうという状況が起こる。湖東地区で地域おこし協力隊員がフットパスコースづくりを行っていることも、同様の懸念があり、契約期間が満了した後、地域の誰が湖東地区のフットパスを地域に向けて定着させ、外部の方々が歩きに来てもらえるように情報を発信するのか、地域内での役割分担が明確でないという不安が存在する。フットパスに魅了された方が、個人的にフットパスづくりのための地域資源の発掘を行っているという「点」としての動きが始まったという状態であるように思える。これはコロナ禍の時代を経て、新たな東近江フットパスのスタートの段階であろう。

一方、大分県臼杵市の場合は、課題としては地域内連携の体制づくりであるように感じている。臼杵市内のフットパスコースは、地域の様々な資源をつなぎ合わせて線的な導線を確保しようという意図は強く感じられる。しかし、地区ごとの取り組みであり、やはり臼杵市全域で歩く人を歓迎するという明確な役割分担の下、一体的な取り組みとして臼杵フットパスがブランディングできているかどうかは、いささか疑わしい。臼杵フットパスには、臼杵フットパス研究会（旧臼杵市）とGT研究会（旧野津町）の2つの中心的なフットパスづくりの主体が存在している。美里フットパスがある美里町も、旧中央町と旧砥用町との合併によって新しく生まれた町ではあるが、美里フットパスと言えば、「棚田をはじめとする良好な田園景観」、「縁側カフェや軽トラカフェなどの地域の食文化を楽しめる機会」、そして何よりも「地域住民からの積極的な声掛け」という統一的なブランドイメージが存在する。臼杵フットパスはその統一的なブランドイメージの形成が今後の大きな課題となっており、上記した2つの研究会を中心に「地域の協力を得つつ」、線的なフットパスづくりに励んでいる段階であるといえる。

5.2 目指すべき美里フットパスの到達点

美里フットパスは「交流人口の増加」をある程度達成し、徐々に「交流人口を関係人口に」という段階に至っていると考える。地域を訪れた人たちを、地域のファンになってもらい、リピーターとなってもらったり、地域づくりの担い手となってもらったりするなど、

より地域との関係性を濃密にしていく取り組みを始めた。

具体的には、民泊の推進や縁側カフェの常設、里山遊びの体験メニューの充実などがそれにあたる。どれも美里町内の一般住民がそれらの担い手であり、これらの繋がりは美里フットパスづくりの中で形成されてきた新たなコミュニティである。地縁に限らず、旧中央町・旧砥用町の関係もなく、美里町全域で展開されているものである。美里フットパスづくりによって、繋がった商工会の人、農家、料理好きの主婦など、美里町に住む一般の方々が直接、フットパスを歩きに来た人と接点を持ち、交流を楽しんでいる。美里町産業連携協議会が軸となり、美里フットパスを歩きに来た人が、より美里での滞在時間を増やし、より美里町のファンになってもらうための取り組みを提供しているのである。この段階に至り、ようやく「フットパス式まちづくり」と呼べるものとなるのだろう。

フットパスを歩きに定期的に地域に外部者が訪れるようになると、地域側も日常的にその対応に適応するために、来訪者への対応に慣れていく。フットパスが地域の生活空間に入ってきて良いという地域側の意思表示である以上、来訪者は安心して地域内を散策できるのである。ここで「フットパス式まちづくり」が成功するための条件としては、日常的に地域社会に来訪者が来た際、地域社会側がそれを受容できる体制が確保されているかである。美里式フットパスの場合、日ごろやっていることを、来訪者が来ても「同じことを体験させてあげてください」とし、「一緒になって楽しんでくれれば良いから」ということを基本姿勢としている。まさに、フットパスの理念である「地域のありのままを楽しむ」ことを目指しているのである。歩く道だけでなく、ありのままの暮らしや地域文化を来訪者も共に関わられる、参加できる取り組みはまさに関係人口を増加させるための、極めて有効な策であると考えられる。

以上のように、本稿においては、フットパスの先進地域である熊本県美里町と「美里式フットパス」を取り入れている大分県臼杵市、そして滋賀県東近江市の2つの地域を比較することによって、「フットパス式まちづくり」に必要な要素やその過程を明らかにすることができた。これからは、このフットパス式まちづくりのモデルを、特定の地域のみならず、日本の様々な地域において展開していくことで、本理論の汎用性をより高めていきたいと思っている。

謝辞

本研究は、公益財団法人サントリー文化財団 2021 年度研究助成「地域文化活動の継承と発展を考える」[「関係人口の創造を通じた地域文化の魅力再発見と継承の地域ネットワーク構築」(研究代表者:廣川祐司)と 2021 年度採択北九州市立大学特別研究推進費「エコツーリズム・グリーンツーリズムから『サステナブルツーリズム』へ」(研究代表者:廣川祐司)による研究成果である。また、コロナ禍が終息し得ていない時期に、本調査を受け入れて頂き、調査に協力して頂いた、美里フットパス協会の井澤るり子氏、民宿幸登里さん、民泊きつねのてぶくろさん、美里フットパス縁側カフェの皆様、東近江市の関係者の皆様、

臼杵フットパス研究会の皆様、吉四六さん村グリーンツーリズム研究会の皆様には、改めてお礼申し上げます。

参考文献

- 泉留維・廣川祐司 (2018) 「日本のフットパスにおけるウォーカーの志向について」, 『専修経済学論集』 第 52 巻第 3 号, pp.21-33.
- 神谷由紀子 (2014) 『フットパスによるまちづくり 地域の小径を楽しみながら歩く』, 水曜社.
- 川上友貴・田中尚人 (2014) 「美里町フットパス事業に見る住民参加の進展に関する研究」, 『第 50 回土木計画学研究・講演集』, pp.195-200.
- 塩路有子 (2018) 「英国におけるパブリック・フットパスと地域振興 -Walkers are Welcome タウンの活動-」, 『阪南論集 社会科学編』 Vol. 51 No. 3, pp.213-221.
- 寺村淳 (2015) 「地域づくりにおけるフットパスの有効性とコーディネーターの役割に関する研究—熊本県美里町の『美里式フットパス』を事例として—」, 『農村計画学会誌』 34 巻, p. 219-224.
- 廣川祐司 (2014) 「フットパスの創造とツーリズム—熊本県美里町の地域づくりと生業の可能性」, 三俣学編 『エコロジーとコモンズ—環境ガバナンスと地域自立の思想』 晃洋書房.
- 廣川祐司 (2014) 「地域活性化のツールとしてのフットパス観光—公共性を有した地域空間のオープンアクセス化を目指して—」, 『2013 年度 北九州市立大学都市政策研究所地域課題研究』, pp.59-75.
- 廣川祐司 (2015) 「フットパスによる地域創生のモデル化の試み—持続可能な発展における『開発』概念の再定位」, 千葉大学経済学会 『経済研究』 29 巻 4 号, pp.509-543.
- 廣川祐司 (2021) 「『地域振興のためのフットパス観光』に取り組む地方公立大学の挑戦」, 日本交通公社 『観光文化』 45 巻 3 号, pp. 50-53.
- 見館好隆・廣川祐司・村江史年・内田晃 (2016) 「大学生が地域社会を変革する『地方創生モデル』の開発—地方都市におけるフットパス導入による地域活性化の事例を用いて—」, 京都大学高等教育研究開発推進センター 『京都大学高等教育研究』 22 巻, pp.11-19.

参考資料

NPO 法人大分県グリーンツーリズム研究会

(<https://www.oita-gt.jp/%E5%90%89%E5%9B%9B%E5%85%AD%E3%82%B0%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%B3%E3%83%84%E3%83%BC%E3%83%AA%E3%82%BA%E3%83%A0%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A/>), 2021 年 12 月 13 日閲覧.

JTB 総合研究所 「交流人口」, 『観光用語集』

(<https://www.tourism.jp/tourism-database/glossary/exchange-population/>),
2021年12月13日閲覧.

総務省関係人口ポータルサイト「関係人口とは」

(<https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.2html>), 2021年12月13日
閲覧.

美里町「美里町人口ビジョン」

(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/22762.pdf>), 2021年12月
13日閲覧.

美里町「令和元年度 美里町産業連携協議会活動報告書」

([https://www.town.kumamoto-misato.lg.jp/dl?q=19181_filelib_76cad12d5cd0dedb
25755f78edb62e7e.pdf](https://www.town.kumamoto-misato.lg.jp/dl?q=19181_filelib_76cad12d5cd0dedb25755f78edb62e7e.pdf)), 2021年12月13日閲覧.

美里フットパス協会ホームページ (<https://misatofp.jimdofree.com/>), 2021年12月13
日閲覧.

新しい地域づくりプロジェクト地域づくり+美里C O c C A R U (こっかる) プロジェ
クト (<https://chiiki-plus.com/42/>), 2021年12月13日閲覧.